

フォトコンテストから 見解く ダムに対する 認知と興味

土木写真家

西山 芳一



Hoichi Nishiyama

数多い土木や建設系の フォトコンテスト

土木を見始め、撮り始めて三十年有余年。その間に変わってきたことは多々ある。技術はもちろんのことだが、現場の安全性の向上が一番であろう。もう一つ特筆しておきたいのは、以前は負のイメージを持たれていた建設現場や既存の構造物を一般の方々に堂々と見せるという努力の表れである。その一つの方法がフォトコンテストの企画である。

現在、土木や建設、交通などをテーマにしたフォトコンテストは多い。地方の行政や関連団体が主催するものも含めれば相当な数に及ぶ。おそらく作品応募の始まりはインターネットの普及と期を一にしているものと思われる。対象を撮影するには現地への訪問が必須であり、審査結果の発表もイベントとして現場や構造物の認知や興味を喚起させる。

私も年に数回はこのようなフォトコンテストの審査に駆り出されるが、今回は双方とも二〇年ほど審査

をさせていただいている二つのダム関連の団体が主催するものを中心に被写体としてのダムを見てゆこう。

ダムフォトコンテストの 現状

ダムのフォトコンテストに応募してくる作品は供用中のものがほとんどだが、石張りの美しい文化財指定を受ける土木遺産のダムも増えてきた。徐々にはあるが応募が多くなったのがマルチプルアーチの豊稔池ダム（香川県）、越流の美しい白水ダム（大分県）、千苅ダム（兵庫県）、千本ダム（島根県）などである。

建設中のダムに関しては首都圏から近く草津温泉への途中ということもあり、見学場の整備された八ツ場ダム（群馬県）が昨年までかなり多く見られた。直轄で建設中のダム自体は一〇年、二〇年前に比べ、かなり減少して再開発も含めて現行で一〇基に満たない。どれも見学場所はなんとか整備されている

が、ダム本体の形状はどれもまだ見えていない。来年になれば南摩ダム（栃木県）や立野ダム（熊本県）がなんとか撮り頃になるであろう。応募数を見てみると、両団体とも毎年数百点から千点の間と多く、写真としてのクオリティーも年々確実に上がっている。審査するほうも大変である。コロナ禍の最中だったが一昨年は応募が増えていた。屋外で単独行の可能なダム撮影は密にならずにうってつけだったのだろう。

ダムマニアの活躍

私が土木を撮り始めた頃は高度成長期に次々と思われるダムの建設ラッシュだったが、同時に「自然破壊」とか「ダムはムダ」とか言われて受難の時期であった。政権の交代によるダム建設の縮小も私にとっては悲しかった。

だが、その頃現れたのが「ダムマニア」である。彼らはダム関連団体のホームページを通じてハンドル

ネームで呼び合い、親交を深めダムの知識を向上させていった。その団体の理事も率先してハンドルネームを使い、専門分野などの質問に答えていたりした。最初は「撮り鉄」ならぬ「撮りダム」のマニアが中心で、情報の行き届いた彼らは審査員も驚くほどコンテストに応募する作品のクオリティーをどんどん上げてゆく。やがてそのうちの一人が地域活性の基となりダムを持つ地方から引く手の止まない「ダムカレー」を創出する。あるダムのサーチャーが越流を撮影に行った時、国土交通省のホームページに発表されたそのダムの流入水量を計算して「何時何分頃に越流しますよ」と電話で伝えてくれたのもダムマニアの一人だった。昨今のダムに対する評価や意識を変えたのは「温暖化」だけでなく、ダムマニアのおかげによるところも多いと思っている。

まとめ

ダムの写真は撮っていても審査員

として選んでいても楽しいが、それなりに難しいところもある。そのほとんどが山中に存在し、単なる巨大なコンクリートや岩石の壁が自然と対峙したり融合したりする様は他の写真分野にはない趣である。作品の中には明らかに季節や光や雲を丹念に選んで何度も通い、ようやく撮影できた一枚を応募してきたというものもあれば、一期一会的なラッキーな巡り合いを収めた作品もある。そんな被写体ゆえ、夜間や雪中の撮影も危険だがあまり厭われないし、審査ではそういった作品を選んでしまう可能性も高い。応募される方々においてはくれぐれも安全に留意され、撮影に挑んでほしい。

そろそろ竣工から百年を迎えるダムも次々と補修がなされている。そんな土木遺産に関しては文化財としての側面も重要であり、周辺整備はもちろん、見た目の保存も大事である。新設として建設中のダムはもつと見せる努力をして欲しい。直轄ダムでは一様に展望台が整備されているが、作業をしているにもか

かわらず夜間立入禁止の所も多い。補助ダムに関しては、本来主要道路からのアクセスが悪く展望台の整備されていないものがあるが、工事用道路の一時開放など見せる努力をすればなんとかなりそうである。これから大きなダムの再開発も進んでくる。鶴田ダム（鹿児島県）では視点場もよく、多くの作品の応募が見られた。

フォトコンテストとは、その応募数の増減や応募作品のクオリティーがその被写体自体の評価にも直接つながる大事な企画である。多くの方々に見てもらい、撮ってもらい、表現された素晴らしい姿を選ばれた写真を見て訪れてもらうのが、構造物にとっても関係者にとっても幸せなのではなからうか。なるべく多くの人に見てもらい撮ってもらうと、尚更美しくなっていくのはなんでも同じなのである。